

古見明湖会

古見地区納涼祭

広報委員 山本 昌孝

夏の夕暮れが古見児童公園を包み込むころ、赤い提灯に灯が入り、静かだった広場は少しずつ祭りの顔を見せ始めます。昼間の強い日差しを受け止めた地面は、まだぬくもりを残し、その上を夜風がやさしく撫でていきます。遠くから聞こえてくる納涼祭の賑わいの音は、町の人々を自然と公園へと導いていました。

やぐらを中心に、盆踊りの輪がゆっくりと広がります。浴衣姿の人もいれば、仕事帰りのままの人もいます。それでも、音に合わせて手足を動かせば、服装の違いなど気にならなくなるから不思議です。踊りの列には、まだ振り付けを覚えきれていない子どもたちが混ざり、見よう見まねで一生懸命に体を動かしています。間違えても、笑われることは

ありません。むしろ、その姿が場の空気を和ませ、周囲の大人たちの笑顔を引き出していました。

子どもたちの笑い声は、夏の夜にひときわ明るく響く。友だちと目を合わせてはしゃぎ、時には転びそうになりながらも、またすぐに立ち上がって踊りの輪に戻ります。その無邪気さは、見ている大人たちの心に、忘れかけていた昔の記憶を呼び覚まします。かつて自分も、同じ場所で、同じように夏祭りを楽しんでいたのだと。

公園の端には屋台が並び、団子の甘い香りと焼き鳥の香ばしい煙が、夜気に溶け込んでいきます。焼き鳥が焼ける音、団子を受け取った子どもたちの弾んだ声、久しぶりに顔を合わせた町の人々の会話が重なり合い、祭りは賑やかさを増していきます。

古見の納涼祭は、決して大きな祭りではありません。華やかな演出や派手な出し物があるわけでもありません。しかし、この場所に

は、町の人々が同じ時間を共有し、同じ音に身を委ねることによって生まれる確かなつながりがあります。踊りの音楽が夜空に消え、提灯の灯りが一つずつ消えていくころ、祭りは静かに幕をおろします。それでも、この夜の思い出は、人々の心の中に残り、また来年の夏へと受け継がれていくのでしよう。

こうして古見児童公園の夏は、今年も変わらぬ温もりを残しながら、ゆっくりと更けていきました。

